



愛と誠の シグナリング

kanda-noie

1. 愛と誠のシグナリング

思えば今日までの人生はあまり運の良いものではなかったのかもしれない。家に居れば野球の白球が窓を割り、外を歩けば犬に追いかけられる。極めつけは親のいきなりの転勤だ。地元の高校に入学して4か月。ようやく高校にも慣れてきたところに親の転勤だ。マコトに家は別に転勤族というわけではない。単にタイミングが極めて悪かっただけなのだ。こうしてマコトは夏休み中という最悪のタイミング転校することになった。送別会が開かれることもなく、数少ない友人とひっそりとお別れ会を開いた。こう聞くとマコトという人物は不運に嘆く青年のように感じられるが、こうして振り返ることが無ければ個人的には大して問題を感じていない。多少の不運がなんだ。それも個性の一つだろう。何はともあれこうして僕ことマコトは内田高校へと転校することとなったのだ。

転校初日の朝は透き通るような青空で制服が少し暑いくらいに感じる。汗は掻きたくないが転校初日から遅刻するのもまずいだらう。高校に至る坂道を小走りで上っていく。登校初日。こういう日は大抵いつも何かが起きる。マコトは経験上嫌な予感がしていた。そして、その予感は見事に的中することとなる。歩道橋を降りてすぐの地面におばあさんと思しき人がうずくまっている。

「…！だ、大丈夫ですか!？」

おばあさんはそれには答えず、ずっと腰を抑えてうずくまっている。

「大丈夫ですか？どうしたんですか？」

緊急事態に気が動転してきた。まさか歩道橋から落ちたのだろうか。でも手にはしっかり買い物袋を握っていて、中身がこぼれている様子でもない。

「こ、腰が…ぎくって…」

…ぎっくり腰だろうか。途端に気が緩み安堵のため息が出る。しかし本人からしたらぎっくり腰なんてとんでもない状態だ。放っておくわけにもいかず、とりあえず携帯で救急車を呼ぶ。このぎっくり腰のおばあちゃんはこちらから20分ほど歩いたところに住むご婦人らしく、買い物の帰り道に歩道橋を超えたところ突然ぎっくり腰になったようだ。一通り連絡が終わり、救急車が到着するまでおばあちゃんと待つこととなる。

「いたたたたた…ゴメンねえ。その制服ってことは内田高校の学生さんかい？」

「あ、はい。って言っても転校してきたばかりでまだ全然わかってないんですけどね」

そういえばもう転校初日の遅刻は確定してしまった。けれどもう乗りかかった船だ。さっぱり諦めているのもうあまり気にしていない。

「あらあらそれは申し訳ないことをしたねえ…あたた…もう大丈夫だから」

「いえ、大丈夫なんで気にしないでください」

「そんなこと言ってもねえ…」

そのとき自分たちの横を小走りに通り過ぎる人影があった。その人影は通り過ぎたかと思うと一瞬にして戻ってきた。

「あれ？おばあちゃんまた腰やっちゃったの？」

「最近調子が良かったから大丈夫だと思ってたんだけどねえ」

「もう。そういうときが一番危ないんだよ？救急車呼ぶ？」

どうやら二人は顔見知りだったようだ。

「いや、この青年がもう呼んでくれたから大丈夫。それよりアイちゃん時間の方は大丈夫なのかい？」

突然の来訪者はアイという名前らしい。その娘はあからさまにしまったという顔を見ると

「見たことない顔だけど…君も内田高校の子だよな？ほら、急ごっ！」

そう言って彼女は高校へ向かおうとするが、正直僕は動けないおばあちゃんをここに放っておくことに抵抗を感じる。

「いや、僕は「行っておいで。もう大丈夫。救急車を待つなんて慣れたもんさ。この子には何度も助けてもらってるしね」

そう言うとおばあちゃんは彼女に笑顔を送る。これだけで二人の信頼感は確かなものだと感じる事が出来た。

「おばあちゃん、ごめんね！」

「はいはい、行っておいで。ありがとねえ」

こうしておばあちゃんに見送られながら僕ら二人は急いで高校へと向かった。

「転校初日から結構な遅刻ですね。弁明はあとで聞きますからとりあえず教室に向かいなさい。

君は…108組だね。ここを右に出て階段で三階まで上がれば見えるはずだよ」

結局僕と彼女は間に合わなかった。玄関でアイさんと別れ、そのまま職員室へと直行したもの、そこに待つのは呆れた目。それもそうか。いまだき転校初日で遅刻なんてベタすぎて恋愛小説でも書かれない。階段を駆け上り立ち並ぶ教室から108組を見つける。教室に入る直前に息を整えようとするが、いまさら緊張してきたようだ。心臓がずっと早鐘を打っている。いつまでも落ち着かない心臓は諦めてクラスの引き戸へ手をかける。

—ガラッ—

—ぼふん—

「…え？」

「おー！よっしゃー、うまくいった！…って誰？」

気づけば僕は粉まみれだった。典型的なブービートラップ。いまさらこんなものに引っかかる奴なんかいないと言われる天然記念物レベルの悪戯だ。…不運だ。焦っていたとはいえまさかこんな単純な罠に引っかかるとは。大抵の不運に慣れている僕は粉まみれになったことよりこんなことに引っかかってしまったことにだいぶショックを受けていた。予想外の登場人物に教室の生徒もざわつき始める。そのうち主犯者であろう人物が慌てて駆け寄ってくる。

「おい、ごめん！大丈夫か？いやあまさか先生以外が入ってくると思ってなかったんだ。学ランなら貸すから！な！な！」

そこまで一気にまくしたてると彼は僕に自分の学ランを押し付けてくる。何が「な！」なのだろうか。確かに僕の学ランはブービートラップにより盛大に粉まみれになっている。しかしこの男の子の体格は僕のそれよりだいぶ良い。身長というか体格がすごく違うのだ。これを着た僕はさぞ滑稽に見えるだろう。

「おい、大丈夫か？」

いつまでも返事をしない僕を本気で心配してるのか彼が下からのぞきこんでくる。

「あ、ああ大丈夫。気にしないで。それより先生はいらっしゃらないの？」

「先生は今配布資料を取りに行ってるけど…えーっと、どちら様？」

「んーっと、僕は「おーい、どーした。お前ら3分間も待ってらんないのか。席に着けー。ん？」
どうやらこの気だるげなおじさんが担任らしい。

「あー君、校長の言っていた転入生だね。じゃあ自己紹介をしてくれるかな」

そう言ってざわついた教室を静かにさせ、僕を教壇の方へ連れて行く。

「えー、変な時期だが転入生だ。ほれ、自己紹介」

「あ、はい。えーっと本日よりこの高校でお世話になります。立野マコトです。よろしくお願ひします」

拍手とともにまた教室がざわつき始める。こんな時期に転入生など普通に考えたらありえないからだろう。

「とりあえず席は空いている所を使え。羽鳥、お前の隣だ。」

羽鳥さんとはどなただろう、と思っていると一人こっちを向いてぽかんとしている子がいる。その顔を見て僕の方も口があんぐりとなる。その子は今朝出会ったばかりの女の子だったのだ。

「よ、よろしく」

「こ、こちらこそよろしくね」

お互いぎこちないまま席に着く。

「ん、二人とも知り合いなのかー？立野一転校初日からやるなーお前」

「「いやいやいやいや！」」

ハモってしまった…誰かアノ浮ついた教師を殴り飛ばしてくれないだろうか。

—キーンコーンカーンコーン—

「立野！一緒に昼飯食べないか！」

昼休みになると例のブービートラップ男がダッシュできた。転校初日からあんなことになってしまったの一応気にしてくれているのだろうか。ありがたいことである。

「ってあー、ごめん。この後職員室に呼ばれてるんだ」

「おいおい、転入初日から何かやらかしたのか？」

「ほら、僕初日から遅刻したでしょ。たぶんそのことについてだよ。」

「ああ、なるほど頑張れ！じゃあ終わったら一緒に食おうぜ」

「うん、ありがと。じゃあまたあとでね」

職員室にたどり着き先生からしこたま怒られた後、職員室をでるとそこにはなんと先客が居た。

「あ、えーっと立野君、だよな？先生に怒られちゃった？」

まさかわざわざそのことを確認しに来てくれたのだろうか。

「うん、おばあちゃんがって言うてみたんだけど信じてもらえなかったよ」

苦笑交じりにそう返すと羽鳥さんはいきなり職員室のドアを開けた。

「先生！あたし、立野君がおばあちゃんを助けている所をちゃんと見てました！ぎっくり腰のおばあちゃんを見つけて救急車まで呼んで…なのにちゃんと確認もしないで立野君を怒るなんてひどいです！」

「！？☆#♪×□△●」

突然のことにひどく狼狽した。この子はそれを保証するために来てくれたのだ。なんて優しい人なんだ。その頃から、僕はなんとなく羽鳥さんを意識するようになってしまったのだ。

その後教室に戻るとそのことが少し噂になっていた。曰く羽鳥は立野に気があるだとか、立野が羽鳥を落とそうとしてるだとか。そして、今日一緒に登校してきたこともなぜか教室中に知れ渡っていた。

「立野！お前凄いな！転校初日からこんなに仕掛けるなんて！しかも羽鳥を選ぶとかお前見る目あるなー」

そのことで僕らはなぜか気まズくなくなってしまい、お互い少し距離を置くようになってしまった。しかし、あの一件以来、ことあるごとに僕の目は羽鳥さんを追ってしまいうようになっていた。プリントを配るときに一人だけ目線を送ってしまったり、体育の応援の時に羽鳥さんだけ応援してしまったり、文化祭のクラス委員に推薦してしまったり。そんなに話しかけはしなかったけど、とにかくことあるごとに羽鳥さんを推してしまうようになっていた。そして月日は流れ、内田高校は文化祭を迎えることとなった

—後夜祭—

この高校の後夜祭は校庭でのキャンプファイヤーそして全校生徒による肝試し大会というわりと大がかりなプログラムとなっている。さらに後夜祭においても文化祭同様出店が出ている。学生による学生のための後夜祭。それが内田高校伝統の文化祭最後の行事なのだ。キャンプファイヤーでは「お願いシート」という特殊な伝統が残っている。文化祭期間中に全校生徒が短冊にお願いを書き、実行委員がキャンプファイヤーで読み上げ、火にくべるというもので毎年過激なお願いが書かれることで盛り上がるらしい。全校生徒による肝試し大会はキャンプファイヤーの火が消えてから行われる夜通しのイベントでクラスの男女でペアを作り、校舎内を巡るといふものだ。もちろん校舎内にはありとあらゆるトラップ、そしてお化けが配備されている。毎年この行事でカップルが誕生するらしく町でも話題の行事となっている。高校も何に力を入れてるんだか。

「さて、僕のペアは…」

クラス内ペアは公平にくじ引きで決められており、その結果は本番直前まで知ることが出来なかった。誘導にしたがって待ち合わせ場所、つまりスタート地点へと向かう。

「「あ…」」

顔を合わせた瞬間、お互いの口から同じ言葉がこぼれた。転入初日の一件以来、何かがない限りお互い話しかけられなかったのだ。

「は、羽鳥さん、だったんだねペア」

なんて気の利かないセリフだったのだろう。

「う、うん」

そらみろそれしか答えられないような質問だ。すかさずなにか話題を探そうと思考を巡らす。

「は、羽鳥さんはお願いシートになんてお願いをしたの？」

「んー、立野君は？」

「え、えーっと…」

まさか本当のことは言えまい。

「え、えーっと…世界、平和？」

「ぷっ！あはははは。まさかそんな王道を返されるとは思わなかったなー」

お、何やらよくわからないがごまかしは成功したらしい。

「で、羽鳥さんは？」

「えー、教えない。だって立野君も本当のこと言ってないでしょ？」

訂正。ごまかしは見事に失敗していたようだ。だが場もなんとか和んできたしよしとしようではないか。そう自分を納得させると実行委員の方からスタートするように指示された。

「よし、じゃあ行こうか」

「あたしこういうの苦手なんだよなー。先に逃げたりしないでね？」

—肝試し—

肝試し中に何があったかは割愛させていただこう。まあ要約すると大変だった、ということだ。実行委員会の本気をとくと味わわせていただいた。とにかく長い。トラップが多い。途中で手錠がつけられたり懐中電灯を没収されたり、こだわりすぎて心身共にぼろぼろだ。極めつきは羽鳥さんの奇行だ。先に逃げたりしないでね、と言っておきながら最初のお化けでダッシュで逃げて行った。その羽鳥さんを探したりまた消えたり探したりでもう怖がる余裕なんてあまりなかった。

ゴールを超えるとそこは校舎の裏側だった。近くには小さな鳥居の神社がある。内田高校は敷地内に神社を持っているという謎の立地らしい。

「あー怖かったああ…」

そう言って羽鳥さんは神社横の石垣に腰を掛ける。

「あーつかれたああ…」

肝試しで心底疲れた僕も彼女の隣に腰を掛ける。

どうやら次のペアが来ると前のグループはそこから追い出されるシステムらしい。あたりには誰もおらず、夜の静寂だけが二人を包んでいた。

彼女はどこか所在なさげに、そして何かを待ち受けるかのように佇んでいる。これはつまり、まさか…イケる！今しかない！

「羽鳥さん！あ、あの、ぼ、僕と…付き合ってください！」

「ごめんなさい！」

即答だった。何がイケるだ。そして間髪いれないこの返事はいかがなものだろうか。さながらここで告白されることをわかっていたような返事の速さだ。

「あんなに変なシグナリングをされてたら流石にわかるよ」

「しぐな、りんぐ？」

突然の言葉に頭が置いて行かれる。

「…君の変なアピールのこと。プリント配るときに見つめてきたり、体育であたしのことばかり応援したり。経済学では他の人が真似できないようなシグナルを発することで相手に自分はこういう情報を持っているよってアピールすることをシグナリングっていうの。相手に自分の性質を伝えることで私的情報を減らして良い財だっってわかってもらおうとしてね」

経済学？私的情報？財？

「例えば君が就活する時に公認会計士の資格を取ったとするでしょ？その資格を持つことで他の人より優れてるよってアピールするのがシグナリングなの」

要するに僕がアイさんにアピールしてたあれこれはまさにそのシグナリングにあたるわけだ。つまり僕の感情筒抜け！しかも冷静に分析されてる！

「ごめんね。あたし、今人と付き合っちゃいけないの」

頭を抱えて地面をのた打ち回る僕にアイは追い討ちをかけるかのように言葉をかける。

そして気まずい沈黙が二人の間を流れる。何かを言わなければ…。脳が激しく回り、現状を切り抜ける最適解を導き出す。

「その…経済学のこと、もっと教えてくれないかな。」

いやいやいやいや、僕の脳みそよ。お前は腐っているのか。こんな言葉がなぜ口から飛び出たのか。自分でもわけがわからず再度頭を抱える。なんせ相手は今まさに告白し、そして断られた相手なのだ。

「い、いや、ごめん！なんでもな…」

「いいよ」

「うん、ごめん。いきな…え!？」

「いいよ。とにかく今君とは付き合えないけど、まずはちゃんとお友達からよろしくね。君のことはマコトって呼ぶからあたしのことはアイって読んで」

こうしてアイとマコト、そして二人をつなぐ経済学の物語が幕を開けた。